

# スポーツ・パフォーマンスの質的・現象学的記述の方法

河野 哲也 (Tetsuya Kono)

立教大学

認知哲学における知覚と概念をめぐるマクダウェルドレイファス論争では、個別的コンテクストに密着した「非概念的な没入的対処」とそこを離れて概念的・合理的に思考する上層階との区別や関係が議論されるなかで、状況への身体的かつ知性的な応答が課題に上がってきた (McDowell 1994, 2007; Dreyfus 2005, 2007; Dreyfus and Taylor 2015)。身体性認知科学や関連する哲学においては、スポーツや演劇、ダンスなどにおけるスキルやパフォーマンスに注目が集まり (Fridland and Pavese 2021)、スポーツ心理学との身体性認知科学との共同研究 (Cappuccio 2019; Smith and Sparkes 2019) が興隆した。さらに、アートやスポーツの分野と連携した「パフォーマンス哲学」という分野がシリーズで出版を開始している (Chambers 2017; Grant et al. 2019; Johansson 2008; Maoilearca & Lagaay 2020; Welch 2019)。

スポーツ学や運動学が探求するさまざまな現象は、認知哲学にとっても重要なテーマであるとともに、それをどのように研究するかという方法論的問題は、スポーツ学や運動学全体の基礎として無視できない問いのはずである。

多くのスポーツの競技や練習の場面において身体同士のやりとりが生じるが、これについては、練習の場面であっても一回性の強い現象であり、数量的・定量的に捉えることが困難な身体運動であることが指摘されてきた。一回性が強いパフォーマンスという現象を捉えるには、再現可能性を研究の基礎に据える従来のハードサイエンスは最初から失格しており、これまでの心の哲学で多少触れられてきた習慣性やスキル獲得についての身体論的枠組みだけでも十分とは言えない。この分野では、現象学的記述、質的記述、生態心理学などの心理学的方法を利用しながら、さらに新しい科学方法論が求められている。そこで、本発表では、パフォーマンスという一回性の強い現象をどのように科学的に研究すれば良いのか、パフォーマンスと型に表現される技術との関係性について、以下のような項目について考察する。認知哲学からパフォーマンスの哲学へ、パフォーマンスの特徴、一回性の科学は可能か、科学的真理と記録メディア、スキルとパフォーマンス、「型」の概念、音楽性と型。

パフォーマンスのような個別事例の研究において、どのように再現可能性 (客観性) を確保するかという問いに対する本発表の暫定的な解答は、構成的アプローチと記録メディアの開発によるというものである。構成的アプローチとは、発達モデルを実際の環境の中で作動させ、その挙動から発達を理解する方法である。システムの作動を環境とインタラクションさせて行い、その実現した振る舞いを実際に提示する。いわば、包摂理論の代わりに「モノ」を提示するのであり、M・フーコーが『言葉と物』で定義したような古典主義への回帰することである。そのモノとはデジタルな視聴覚記録のことであり、新しいメディア (ビデオ、ウェブ、デジタルメディア) の発達に伴い、従来科学で言われてきた再現可能性、再観測可能性、共有可能性のあり方が大きく変わる。メデ

ィアの変化によって科学的表現が変化し、それによって「理論（一般性）」の概念そのものが変化するはずである。スポーツで生じている経験を個々の場面をデジタルに記述分析し、デジタルデバイスを用いた共同反照をパフォーマンスの過程そのものに組み込むような、実践—観察、パフォーマンス—鑑賞、行動—認識という二分法を超えた新しい研究方法が提案される。パフォーマンスを、デジタルな方法を用いて、環境のアフォーダンス（境界条件）の制作・設定とその発見による利用（スキル）の観点から分析する可能性を示す。

ただし、スキルとパフォーマンスは簡単に一緒に論じることはできない。両者は、スポーツで言えば、「練習」と「本番（試合）」として対比され、両者を単純に混同することはできない。境界条件は、試合のようなパフォーマンスではより複雑となり、それはしばしばスキル獲得の場面と大きく異なっている。この点は、Sutton & Bicknell (2021) の研究以外にはほとんど論じられていないし、彼らの考察も十分とは言えない。パフォーマンスはスキルの加算に還元できない。そこで注目すべきは、Uehara & Belgrano (Maoilearca & Lagaay 2020) が示唆する、パフォーマンスの哲学の発展としての西田幾多郎の行為的直感についての言及である。現代日本哲学でしばしば言及されてきた「型」と「実践」の議論に注目することで、スキルとパフォーマンスに関するより実証的な研究のための概念モデルを提供できると考えられる。「型＝スキル」をリズムとして、「パフォーマンス」を音楽的全体性として理解することが可能である。

#### 参考文献

- Cappuccio, M. L. (2019). *Handbook of Embodied Cognition and Sport Psychology*. MIT Press.
- Chambers, C. M. (2017). *Performance Studies and Negative Epistemology: Performance Apophatics*. Palgrave Macmillan.
- Dreyfus, H. (2005). "Overcoming the Myth of the Mental," *Proceedings and Addresses of the American Philosophical Association*, 79(2): 47-65.
- (2007). "The Return of the Myth of the Mental," *Inquiry*, Vol.50, 50 (4):352 – 365.
- Dreyfus, H. and Taylor, Ch. (2015). *Retrieving Realism*. Harvard UP.
- Grant, S. et al. (2019). *Performance Phenomenology: To The Thing Itself*. Palgrave Macmillan.
- Maoilearca, L.C. & Lagaay, A. (2020). *The Routledge Companion to Performance Philosophy*. Routledge.
- McDowell, J. (1994). *Mind and World*. Harvard UP.
- (2007). "Response to Dreyfus," *Inquiry*, 50 (4):366 – 370.
- Fridland, E. and Pavese, C. (2021). *The Routledge Handbook of Philosophy of Skill and Expertise*. Routledge.
- Smith, B. and Sparkes, A. C. (2019). *The Routledge Handbook of Qualitative Research in Sport and Exercise*. Routledge.
- Welch, S. (2019). *The Phenomenology of a Performative Knowledge System: Dancing with Native American Epistemology*. Palgrave Macmillan.
- Johansson, O. (2008). *Performance and Philosophy: Interdisciplinary Approaches to the Performing Arts*. VDM Verlag.